

童謡・唱歌の歴史と継承

井手下まゆ 田中彩子
(岡山県立大学 保健福祉学部 子ども学科 2年生)

研究の目的と背景

子どもにとって音楽教育とは、ただ楽しむだけでなく、表現力・協調性・想像力・感受性などを培う上で重要である。現在の保育関係者は、継承意識はあるものの、薄れていると捉えられ(先行研究より)、継承意識を高める必要があると考える。
童謡と唱歌の歴史を辿り、長く後世に継承していく方法を考えることを目的とする。

調査(歴史)方法

過去の音楽関係の教科書や唱歌集などに掲載されている歌曲の特徴や内容、時代の変化に伴う傾向等を調査し、まとめる。

調査(歴史)結果

1918年からの童謡運動(子どもの美しい空想や感情を育てる詩と歌を創作する、大正の一連のこの動き)を経て童謡・唱歌が広まった。初めのうちには外国曲(アメリカやドイツ、スコットランド、フランス等)の翻訳や融合曲が多かったが瀧廉太郎などの日本人の作曲も増えてきた。以下は、1877年から作られた唱歌集である。

年代	唱歌集名	内容
1877~1882	保育唱歌	東京女子師範学校の付属幼稚園のための唱歌集。幼稚園児が歌うには若干難解? Ex.「海ゆかり」「君が代」(当時は国歌ではない)
1881~1884	小学唱歌集	文部省音楽取調掛の編纂による、翻訳唱歌集。 Ex.「螢の光」「ちょうちょう」「むすんでひらいて」
1887	幼稚園唱歌集	文部省音楽取調掛(現:東京芸術大学)が1887(明治20)年12月に出版した幼稚園児のための唱歌集。『小学唱歌集』と同じく、掲載曲の半分ほどがドイツやフランスの民謡・童謡を原曲とした翻訳唱歌となっている(ドイツ歌謡が多い)。 「きらきら星」のメロディで歌う「うずまく水」も収録されている。 Ex.「ちょうちょう」「霞か雲か」「雀のお宿」「蜜蜂(ぶんぶんぶん)」
1888~1892	明治唱歌	1888年5月から1892年4月にかけて、詩人・作詞家の大和田建樹(おおわだ たけき/1857-1910)と、『君が代』作曲者の奥好義(おく よしひさ/1857-1933)によって出版された全六集の唱歌集。 掲載曲は、海外の民謡やクラシック音楽(歌曲)を原曲とした翻訳唱歌が大半を占めている。 Ex.「アルプス一万尺」「故郷の空」
1893	祝日大祭日唱歌	文部省が1893(明治26)年8月に公布した、祝祭日の祝儀のための唱歌集。 Ex.「一月一日(いちがつついたち)」、「君が代」
1889~1901	中等・中学唱歌	尋常中学校向けの音楽教材として、東京音楽学校の編纂により1889年に「中等唱歌集」が出版された。掲載曲は、海外の民謡やクラシック音楽が原曲となっている。Ex.「埴生の宿」 1901年には東京音楽学校による尋常中学校向け唱歌集の第二弾「中学唱歌」が出版された。 Ex.「荒城の月」「箱根八里」(滝廉太郎)
1900~1901	国民唱歌	1900年から1901年にかけて、作曲家・教育者の小山作之助が編纂した唱歌集。 小山作之助が作曲した唱歌、童謡、軍歌、校歌などの総作曲数は1000曲を越えるといわれ、瀧廉太郎も小山を師事していた。 Ex.「夏は来ぬ」
1900~1902	年中唱歌	1900年から1902年にかけて、納所弁次郎と田村虎蔵の共編により出版された全十冊の唱歌集。 最大の特徴としては、これまでの古典的で文語調の歌詞から、子供たちが普段の日常会話で使うような口語的な歌詞に改められた「言文一致唱歌」となっている点が挙げられる。 日本昔ばなしを題材とした作品が多い。 Ex.「桃太郎」「金太郎」「浦島太郎」「花咲爺さん」「うさぎとかめ」
1907	中等教育唱歌集	1907年(明治40年)に共益商社楽器店が出版した音楽教科書。掲載曲のほぼすべてが、海外の歌曲やクラシック音楽などを用いた唱歌となっている。 Ex.「旅愁」「故郷の廃家」
1911~1914	尋常小学校唱歌	文部省が刊行した全6冊の唱歌集。いわゆる「文部省唱歌」。特徴としては、それまで主流だった翻訳唱歌から脱却し、日本人の作曲家による日本独自のメロディと歌詞が用いられている点が挙げられる。 Ex.「かたつむり」「紅葉 もみじ」
1935	新訂高等小学唱歌	1935年に文部省が発行した高等小学校向けの唱歌集。作曲は、信時潔や片山頼太郎が東京音楽学校の教官が担当した。 掲載曲は、今日ではほとんど歌われる機会はない。

童謡・唱歌の定義

童謡	広義には「子ども向けの曲」、狭義には「日本において、大正時代後期以降、子どもに歌われることを目的につくられた文学作品と、それに作曲が施された歌曲」とされている。
唱歌	明治時代以後、昭和16年までの学校教育での音楽の教科名。また、その教科で歌われていた歌曲やそれを歌うこと。

調査(継承)方法

現在の童謡・唱歌の継承状況を調査するため、小学校で実際に使われている教科書(教育芸術社)の小学1~6年生の掲載曲の中から、それぞれの学年で童謡や唱歌を3曲ずつピックアップし、岡山県立大学子ども学科の1~4年生(28人)を対象にアンケートを実施する。

【調査曲】

小学1年生:うみ、ひのまる、たなばたさま
小学2年生:虫の声、しゃぼんだま、かくれんぼ
小学3年生:春の小川、とんぼのめがね、茶摘み
小学4年生:牧場の朝、さくらさくら、茶色の小瓶
小学5年生:こいのぼり、冬景色、子守唄
小学6年生:おぼろ月夜、われは海の子、ふるさと

【解答選択肢】

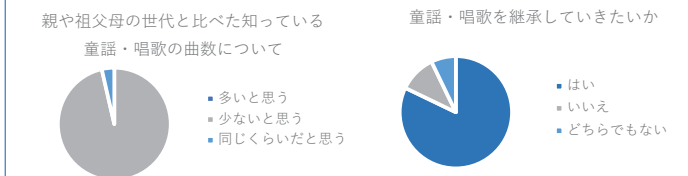
①歌詞も完璧に歌える・②メロディは知っている・③曲名は知っている・④知らない
選択肢①・②を認知度の高い曲、選択肢③・④を低い曲とし、それぞれ5曲をランキング形式に集計し、考察を行った。

また、継承意識に関する質問もアンケートに組み込み、現代の保育学生の継承意欲を調査する。調査項目は、「親や祖父母の世代と比べて知っている童謡や唱歌の曲数について」、「童謡や唱歌を継承していきたいか」の2項目である。

調査(継承)結果

【認知度の高い曲】	【認知度の低い曲】
1位:しゃぼん玉 2位:海・とんぼのめがね 3位:ふるさと	1位:ひのまる 2位:冬げしき 3位:かくれんぼ・牧場の朝・われは海の子
4位:さくらさくら・こいのぼり 5位:たなばたさま	4位:茶色の小瓶 5位:おぼろ月夜

【継承意識について】



まとめ・考察

童謡や唱歌は、外国から伝わった曲を元に作られたのが始まりなので、外国の曲と日本の童謡・唱歌でメロディは同じだが歌詞が全く違うものも存在すると考えられる。
明治時代から作られてきた童謡や唱歌は継承され続けているが、認知度は薄れつつある。認知度の高い曲は、**保育園や幼稚園でも扱われやすい曲が多い**印象を受けた。
実際に、「保育園・幼稚園・こども園で人気のどうよう&あそびうた100〜どんでん歌える!楽しい歌と遊びがドーンと100曲大集合!〜」(「すくい〜く」より)には、認知度の高い曲ランキング内の**7曲中5曲**が収録されており、逆に低い曲ランキング内では1曲も収録されていなかった。
したがって、童謡・唱歌を継承する有効な方法の一つは、小学校就学までにたくさん曲に触れ、親しむことだと考えられる。
逆に、昔の曲や、外国の曲の歌詞を日本語にした曲(茶色の小瓶等)は未就学児には難しく、早くから触れることが難しいため、認知度も低いと考えられる。

今後の課題

保育に関わる人以外も継承意識を高められる方法を考える必要がある。
また、保育園・幼稚園・こども園では扱うことの難しい曲をどのように継承していくかを考える必要がある。